

弱毒タイプ高病原性鳥インフルエンザウイルスの家きん肉内への出現の検証

|         |   |
|---------|---|
| 研究期間    | 平成 23 年度～平成 24 年度   |
| 課題番号    | 2305  |
| 研究実施機関  | (独)農業・食品産業技術総合研究機構(動物衛生研究所)   |
| 研究概要    | <p>我が国では、貿易相手国で低病原性鳥インフルエンザの発生があった際は、家きん肉内からウイルスが検出される可能性があるため、当該国からの家きん肉の輸入停止措置をとっています。</p> <p>しかしながら、国際獣疫事務局(OIE)が、低病原性鳥インフルエンザは家きん肉が感染源となるリスクが低いとみなしていることから、国際基準(OIE 基準)においては、低病原性鳥インフルエンザ発生国からの家きん肉は輸入停止の対象とはされていません。</p> <p>このため、本研究では、家きん肉内からウイルスが検出される可能性について科学的根拠を得るため、低病原性鳥インフルエンザウイルスの家きん肉内への出現を検証しました。</p> <p>(注)弱毒タイプ高病原性鳥インフルエンザは現行の家畜伝染病予防法においては、「低病原性鳥インフルエンザ」という。(2011 年 7 月 1 日改正)</p> |
| 研究成果の概要 | <p>本研究課題の実施により以下の成果を得ました。</p> <p>(1)H5 亜型の低病原性鳥インフルエンザウイルス 7 株及び H7 亜型の低病原性鳥インフルエンザウイルス 3 株をそれぞれ 9 羽の鶏に経鼻又は気管内接種し単独感染実験を行い、その増殖性を踏まえ H5 及び H7 亜型の低病原性鳥インフルエンザウイルスそれぞれ 2 株及び 1 株を選抜した。</p> <p>(2)選抜したウイルスそれぞれについて、白色レグホン 4 週齢雄各 9 羽を用い、ウイルスの単独感染実験及びウイルスとマイコプラズマの共感染実験を行った。</p> <p>以上の 2 通りの実験系について、ウイルス分離、力価測定及びリアルタイム PCR により筋肉及び各臓器におけるウイルス出現・増殖を検証した。</p>  |

(注)研究実施機関の名称は、研究終了時の名称を記載